

四日市ぜんそく 劣悪な状況に怒り



熊本水俣病訴訟の原告団や支援者と。左から3人目が宮本憲一さん、その右隣が渡辺栄蔵原告団長、左隣は日吉フミコ水俣病市民会議会長—1971年

—公害と向き合い始めたのは1961年、静岡市であった自治労(全日本自治団体労働組合)の集會に参加しました。「地域開発の夢と現実」と題した報告があり、三重県の労働者の話に衝撃を受けました。自治体が大学に委託した大気と水質の汚染調査の結果を暴露したのです。三重の四日市コンビナートは開発モデルとされ、公害は発生しないと言われていたが、実際は亜硫酸ガス、廃油、重金属で空気や海が汚され、約8000人のぜんそく患者が出ていた。自治体が報告書を伏せる中で、の勇氣ある告発でした。

—それで四日市へ

四日市市職員労働組合の宿舎に泊まったのですが、悪臭がひどくて眠れない。翌日、昭和四日市石

油を訪ねて「報告書にコンビナートの油が原因で海の魚が臭いと書かれている」と言うと、総務課長は「戦争中に海軍燃料廠のタンカーが爆撃された。そこから流れ出た油が原因」と。コンビナートそばの病院には、ぜんそくの患者さんがベッドに横たわっています。まったく救済されていない。怒りで胸がいっぱいでした。

—公害の実態を記した「恐るべき公害」(64年)は42万部のベストセラーになりました

福岡の八幡市(現北九州市)など各地を回り、62年、雑誌「世界」に「しのびよる公害—その政治経済学」を発表しました。社会学者が公害を論じた初の論文として評判になり、岩波書店から出版の依頼が来しました。「自然科学

者と一緒に学際的な内容にした」とお願いし、大気汚染の大家で京都大教授だった庄司光さんを紹介されました。共著にする条件で庄司さんが示したのは、「宮本は酒が飲めるのか」。酒を浴びるほど飲んで議論しました。

—本は公害と向き合う住民団体のテキストになりました

64年9月、公害反対の住民の勉強会に招かれ、静岡県沼津市を訪ねました。コンビナートを誘致したい静岡県に対し、「四日市の二の舞いにするな」と反対していた。2万5千人が集會に結集し、保守と革新が共闘する姿を見て、「計画は早晚潰れる」と確信した。企業が進出を断念したのは、その翌月でした。地元の高校教師や研究者らが、公害を予測する環境アセスメントを実施したのが大きかった。「公害は出ない」と言う国の調査団と討論会で対決し、論破したのだから。

—63年に公害研究委員会を結成しました

一橋大教授だった都留重人さんの提案で、庄司さん、都市問題に詳しい都立大助教授だった柴田徳衛さんら7人が集まりました。全国公害の現場を調べて回り、国や自治体に政策を提言しました。これが79年に研究者や弁護士らで発足した日本環境會議の母体です。(聞き手・杉本裕明)